「時」熟し、万感の思い込めて

毎日新聞（関西版）
2013.12.25(月)

ザ・タイガースは京都・西陣の小学校の同級生2人が中学高校で友人の輪を広げるなかで結成された。これほど親密に結ばれたバンドは珍しい。解散後四十数年、数度の部分復活を経て初めての全員再会を果たした。

サポートメンバーなしで大舞台に立ったのは、5人の心意気を示す。演奏に危なっかしさは隠せないが、10代で鍛えた技だから基本は踏み外さない。俳優として忙しい岸部一徳（サリー）のベースが気持ち良くノっていた。沢田研二を除けば声のやつれは隠せない。だが白い髪とでっぷり体形と同じく、そこに観客の誰とも同じだけ時が熟した証しを見る。最後に用意された「ラヴ・ラヴ・ラヴ」の「時はあまりにもはやく過ぎゆく」には、万感の思いがこもっていた。

外国曲を集めた第1部では、5人が1曲ずつソロで歌うパートがあり、違う声質を重ねたコーラスが彼らの魅力だったことを思い起こした。中でもピートルズの「ひとりぼっちのあいつ」を選んだ加橋かつみの高い声は、他のグループにない特徴だった。彼が題名通り、真っ先に離脱した歴史に思いをはせた。

後半は白いスーツに着替えてオリジナル曲。ヒット曲が続いた山場で、私は自然と歌い出していた。部屋にポスターを張り、ライブに通った元少女たちは別の曲でそれぞれの記憶を再起動させていたに違いない。メンバー自身も同じぐらい強烈に、あの頃を生きていたはずだ。5人そろったからこそ湧き上がる前向きの力。1968年のアルバムから、新生児を賛美する「生命のカンタータ」と反戦歌「忘れかけた子守唄」を選んだところに、今言いたいことが表れている。

「今日も生きています。明日も生きています」と最後に呼びかけたジュリー。映画『風立ちぬ』の「生きねば」に通じる、つらいなかの希望の声だ。客席だけでなく、幼友だちに向けた言葉と受け取った。

（細川周平・音楽評論家）

イガース2013」で勢ぞろいした
東京・日本武道館公演より
＝3日、須賀川理撮影

音楽評

ザ・タイガース2013

（17日、京セラドーム大阪）